HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国元代医書に見る「回回医学」の特徴
Author(s)	方, 麗娟; 熊倉, 潤//要旨翻訳
Citation	日本中央アジア学会報, 15, 112-112
Issue Date	2019-07-31
DOI	10.14943/jacas.15.112
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88366
Type	article
File Information	JB015_016fang.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

中国元代医書に見る「回回医学」の特徴

方　麗娟

本報告では、中国元代の出版文化、とりわけ「回回医学」の出版物の特徴を分析した。当時の出版文化は、著しい発展を遂げ、上は中央から下は地方に至るまで、出版事業に多大な貢献がなされた。中央政府の出版物に関して言えば、世祖フビライが至元10年（西暦1273年）に秘書監を設置し、図書経籍の管理にあたらせ、翌年また興文署を設置し、経籍を管理させたことから、モンゴル・元朝政府が出版を非常に重視していたことがわかる。

元代の医学の中で、ムスリムの医学（すなわち「回回医学」）は最も特色がある。大量のアラブ、ペルシア文献と「方剤」、薬物が中央アジアのシルクロードを通じて伝来したため、アラブ、ペルシア医学の伝統を継承し、且つその他の系統の医療技術を吸収して形成された中国ムスリム医学――すなわち「回回医学」が元代に完成した。「回回医薬術」は当時民衆に歓迎され、元朝政府は「太醫院廣惠司」を設置し、「回回薬物」を専門に管理し、大都と上都に「回回薬物院」を設置し、さらに『回回薬方』等の医薬専門書を翻訳し、回回医術を広めた。それゆえ本報告では、元代の西域の「本草医薬」の伝来とムスリム医学の形成から始まり、元代医学書の出版状況と出版の特色を論じ、ムスリム医学がモンゴル・元朝期に演じた役割について考察した。

（馬偕醫護管理專科學校通識教育中心、台湾）